

しまふ。

〔我々の『一刀流型』も同じことで、『類型』すなわち型の所作を覚えた記憶を追っかけるだけの「木剣体操」では、いくら繰り返しても『典型』にしてかつ『写実』＝リアリズム＝真剣にはならないと言う事。『典型』『写実』（真剣）にまで昇華せねばならないという点に、一刀流型も同じく、『型の難しさ』を持っているのではなからうか。ではどうしたら、型が『類型』ではなく『典型』に昇華するか。その方法論として。〕

◎心の動きが（中略）リアル（自然）で型になつてゐなければならない。

◎心の動きは必ず姿勢や動きに現れる筈である。

◎そのせりふは押しで、このせりふは引きで、あるいは打つちやりで言へ。そのおし引きの呼吸も動きに現れる筈だ。

◎せりふは語られてゐる意味の伝達を目的とするものではない。一定の状況の下において、それを支配し、それに支配されてゐる人物の意志や動きを表情や仕草と同じく形のある「物」として表出する事。それが目的であり、意味の伝達はその為の手段に過ぎぬ。

◎心の動きを形のある「物」として見せるのがせりふの力学

◎何を喋るかではなく、なぜ喋るのかの「なぜ」を「何」の裏に見せてくれてこそ芝居の面白味がある。

◎真の意味の劇においては、緊迫した関係においては、意識もまた緊迫し、したがつてそのせりふは、程度の差こそあれ、飽くまでも意識的になる筈。意識が強度になればなるほど、話し手と言葉との距離は大になる。話し手と言葉との距離が観客の目に見える様に喋れ。一つ一つの言葉をどの程度に意識してゐるか、その度合ひを役者として明確に把へろ。

〔一刀流型においても、その所作の背後には、必ず心の動きがある筈であり、その『心の動きを形のある「物」として』観客の目に見える様に演じなければいけないといふことでは。何本目の型を、ただ演ずるのではなく、なぜこの型があるのか、その型の本旨を、そして、その場面によって、もたらされる心の動きを、見せる様に演ずることではなからうか。〕

〔型が『典型』に昇華する為の方法論といい、又前述では、部分（現在）を明確にとらえる為の方法論は、といいましたが、そのどちらも根底にあるのは、意識という事なのであります。例えば白刃の真剣勝負の場面では、心の動きは極度の緊迫の状況にある筈であり、その時、剣を使う自分は、強烈な意識、極度に集中した意識で剣を使っている筈である。もし正眼から上段に構えを動かす場合でも、極度に集中し、隙も与えまいとするのであるから、剣と自分（役者なら言葉と話し手）との意識的距離（緊張度）は極大になっている筈である（無意識の場合は距離・緊張度は極小）。そうした状況・場面が支配する、緊張・緊迫の又はそれに対処する心の動きと言うものを、型においては、息づかい、剣先に『形のある物として観客に見せる』（表情・所作に見せる。）それができている時、意識は時間の平面に横這いしておらず（即ち、「記憶の追っかけ」になっておらず）現在に屹立している筈である。現在という『部分は明確にとらへられ』『典型』、写実（真剣）が、そこに実現されている筈である。『心の動きを形のある「物」として見せる』行為によって、『全体を実感』し、必然的生（生の全体的充実感）を味わい、その時型が『典型』に昇華するのである。〕

◎ハムレットは今、この時、なぜ、かういふ言葉でかういふ事を言ふのか、その気持ちを伝えなければならない。しかも一つの行動が他の行動を生む様に、言葉が言葉を生み、呼び起こす様に、その必然性が目に見える様に。

〔以上の様な点に気をつけて、一刀流型を演武する、すなわち類型にならずに典型に昇華する